回覧

塩田地域包括支援センターだより 第36号

（ほうかつ）

令和６年度 夏号　令和６年６月発行
発行：医療法人共和会 塩田病院 塩田地域包括支援センター　編集：センターだより編集委員会

こんにちは！！　スタッフです！！

塩田地域包括支援センターでは、現在７名の職員で活動しております。独居高齢者や高齢者世帯への訪問、介護保険の説明、地域リハビリ、認知症サポーター養成講座、健康教室などの相談・支援、実施を行っております。塩田地域の高齢者の皆さんの相談や自治会が企画した教室や研修に参加・共催など一緒に考え活動しております。よろしくお願い致します。

まずはお電話を…

TEL 0268-37-1537　FAX 0268-37-1538

待ったなしの課題が山積！

中塩田に NPO 統合型地域スポーツクラブがある。チアリーディングチームを指導しているので知られており、地域を元気に、住民を健康に、を合言葉に活動している。このたびのコロナ騒ぎでは閉じこもりがちになった高齢者のフレイル防止にも一役買った。

このクラブでシニアのためのサイクリングのガイドを務めた関係で、「塩田まちづくり協議会・健康福祉部会」に事業者委員としてかかわるようになった。この部会では包括支援センターのスタッフが主導的な役割を果たしている。最近の事業や議題はこのセンターを知ってもらうための地域懇談会の開催や移動困難者のための足の確保の問題などであるが、塩田地区に多数ある自治会ごとに事情が大きく異なっておりなかなか物事が進まない面も感じる。

包括支援センターが目指す「包括的支援」は当初は「高齢者の介護を包括的に支援する」という意味合いだったようだが、最近では生活困窮、虐待、精神障がいなど待ったなしの課題が増え、それらも含めた多面的な支援が迫られている。

このセンターだよりを通してセンターの活動が少しでも住民の皆さんにとり身近で役立つものになることを願っている。　　　　高津宣夫

＊＊

編集後記

選挙運動など一切行わずに、塩田地域包括支援センターの PR 誌の編集委員に当選した。3 月 26 日午前に初顔合わせを行った。センター・コーディネータの矢嶋宏さんと 5 人のメンバーが塩田病院に集まった。さすれば、この 5 人が無投票当選者か。若い人はいないが、皆健康そうだ。筆者ひとりが要介護 1 。杖をついて短い距離を操り人形のように歩いている。

思えば一昨年長い入院生活を経験した。最後は別の病院でリハビリを受け、要介護 2 で退院した。その際、「退院後は訪問リハビリというものがあるから、それを受けると良い」と薦められた。こんな手があるとは知らなかったが、言われた通り、ある病院近くから訪問リハビリに来てもらっている。その後、訪問看護も受けている。

ところで、このような方法があるのを知らなかったらどうするのか。「塩田地域包括支援センター」の出番だ。包括支援センターが直接訪問リハビリや訪問看護をやってくれるわけではないが、センターに電話をすれば何でも相談に乗って、これらを紹介してくれる。利用しない手はない。高齢者本人だけではない。その家族、知り合いなども積極的に相談するのが良い。

服部博嗣

編集委員会が発足しました !!

女性編集者を募集しています！ 介護･ケアを豊かにするために、貴女の経験と知識が必要です。
編集会議もなかなか面白いですよ。お問い合わせは包括支援センター 企画担当 矢嶋まで

私としおだ包括　今号では編集委員が書きました

介護保険は保険証が無いの？

話は一本の杖から始まった。私は今年88歳になる。妻に先立たれ一人暮らしをしている。ご多分にもれず足腰が弱り、30 分も自力では歩けないようになってしまった。民生委員の経験のある女性にどんな杖がいいのか聞いたところ、「包括」に行きなさい、9割引で買えるわよとのご託宣で、喜び勇んで出掛けた。

スタッフは親切だったが結果は無残だった。歩行用の杖は介護保険の対象ではない。また仮に対象内であっても、介護保険証がなければだめだという。そんなもの受け取ったことがないというと、介護保険の対象になる状態であるという認定を受けて、保険証の交付を申請しなければならないという。そんな馬鹿な話があるか、どんな保険も保険料を払えば、例えば健康保険証とか損保にせよ生保にせよ保険証券が手元に来るではないか。

なぜ介護保険は保険料を天引きしておきながら、保険(有資格者)証を交付しないのか。これが最初のかつ最も基本的な私の疑問であった。(続く)　宮崎省吾

※「私の疑問」を次号センターだより内で更に取り上げQ＆A形式で深めます。

＊＊

高齢者に有難い存在

昨年7月夫婦で高原を散策中、妻が尻もちをついて腰を痛め、観光バス会社の方々や救急車のお世話になり病院に搬送された。腰椎の圧迫骨折と診断され入院。40 数日後退院したものの痛みは続き、日々不安が膨らむ一方であった。たぶん掛かりつけの病院か薬屋さんから連絡があったのであろう、塩田地域包括支援センターから電話を頂き、悩みごとを聞いてもらい、それだけでも有難かった。

妻が一番望んでいたのは、自宅の風呂に入りたいこと、腰が痛い時すぐにベッドに横になれるよう自宅を離れたくないこと、少しでも外に出て散歩したいことであった。煩雑な介護申請は「包括」が代行して下さり、「要支援2」の認定を受け、11 月中旬から週2回、訪問介護を受けることになった。介護福祉士さんの手助けを受けながら退院後初めて湯船に浸かったときの妻の嬉しそうな顔。家の周りを 10 数分散歩してきたときの満足そうな顔。

「包括」は我々老夫婦の願いに寄り添い、手が届きそうな目標を次々に助言してくれる有難い存在である。どれほど励みになっていることか。感謝の気持ちで一杯である。　木口憲爾

＊＊

老後の不安

堀内　稔

＊＊